

EINSHTEIN さんの母親へのインタビュー ～ 少年サポートセンターに親子で通って ～

Q：少年サポートセンターはお母さんにとってどんな所でしたか？

- 反抗期がグンと出てきた息子と出かけることなんてなくて、楽しく通わせてもらった。
- あの頃はまだ「反抗期」ってのを私が知らなかった。「なんでそんな偉そうな口きくの！」とか、お説教ばかりしていた。でも少年サポートセンターの人に出会って、「反抗期」っていうのが何なのか、私を見る目が変わった。
- 私自身も話を聞いてもらえてすごく楽になって、息子のことも勘違いしていたなあって思えたり。反抗期があるって正常なことなんやって。食ってかかっていく私も、ちょっとどうかしてたって思うようになった。
それに気づかせてくれたのが少年サポートセンター。

Q：少年サポートセンターで、何か思い出はありますか？

- よく怒られました。私が。
センターの職員さんは、息子の気持ちに寄り添ってくれて、私のことを思いっきり怒ってくれた。「中学生のイライラする気持ち」、「親にわかってもらえない子どもの気持ち」、そして「親のエゴ」なんかを、バーン！とぶつけてきてくれた。でもそんな時、今度は別の職員さんが、「お母さんの気持ちも分かったってよ！」なんて言い返してくれたり…。
目の前で職員さん2人が喧嘩してるのを親子で見ている…親子2人して涙が出てきた。
私たちのために真剣に喧嘩してくれてる気持ちが伝わって、私と息子の関係もほどけていった。
- 今になって、「ああ、サポートされてたんやな」って思う。
私も息子と一緒にサポートされてたんだって。
少年サポートセンターと一緒に体験できて本当に良かった。
- 当時センターに貼ってあったミュージシャンのポスターを見ながら、職員さんが息子に、「このミュージシャン、サポセン通ってたんやで。自分もいつか有名になったらポスター貼らせてな。」みたいな話をしてくれてたのを思い出す。
まさか本当にミュージシャンになれるなんて、あの時は思いもしなかった。

Q：少年サポートセンターに通うようになって、息子さんの変化を何か感じましたか？

- 回数を重ねるたびに、息子が落ち着いていくのがわかった。
- それに、少年サポートセンターに通うようになって、将来を想像したりするようになったのか、高校に行きたいという気持ちにもなったみたいで、落ち着いて勉強するようにもなったし、遊びに行くときも、「何時には帰る」って言うようになってたり、「ごめん」って素直に言うようになっていった。
そしたら私の方も素直になれて、「わかってやれんでゴメンな！」って言えるようになって。
- そして、あの子は少年サポートセンターに通うようになって、自分のことを大切にできるようになって、ちゃんと気持ちを言えるようになった。



Q：いま、子育てに悩んでいる保護者にメッセージをお願いします。

- 子どもが中学生になって反抗期が始まると、どう関わっていいのかわからなくなる。
小さい頃とは違って、怖くなってくる。親に対する暴言も出てきたりして、「生意気なこと言うて！」ってなってしまう。でも反抗期って、正常に、自分の言いたいことを言えるようになったんだって、自信を持ったらいいと思う。すごく正常な反応。
「嫌だ！学校なんか行くか！」ってなっても、小さい頃のイヤイヤ期みたいに抱っこできるわけでもないし、「行きなさい！」って怒鳴るしかできなくて…
でも反抗期って、正常に成長してる証拠だって思っしてほしい。
- そして、どんなことがあっても自分の子を信じてあげてほしい。必ず戻ってくる。
大丈夫ですよって言いたい。反抗期は異常じゃない。
「何が言いたいんだろう」って…「反抗期」の裏に隠れた気持ちを知ったら、たまらなく感動する。でも、それに気づくまでがつらくて、その途中で傷つけ合うことになって、うっかり迷路に入ってしまった。そしたら、一人で悩まず相談するべき。
学校でできなかつたら、少年サポートセンターとかこういうところで相談すること。
相談することは恥じゃないって知っほしい。

Q：改めて、少年サポートセンターはEINSHTEINさんとお母さんにとって、どんな場所でしたか？

- 少年サポートセンターで私も変わった。息子の本当を知った。
息子は荒れてたけど、そこじゃなくて、荒れてることじゃなくて、荒れてる息子の心を見れるようになった。私は息子の本当を知った。信じることができるようになった。
- 話すことで救われることがある。
息子はここに通うようになって、「しんどい」って言ってくれるようになった。
胸の中にずっと抱え込んでいた気持ちを吐き出してくれるようになった。だから向き合えた。
たくさん泣いたけど、気持ちが全部出て、ものの見方が変わって強くもなれた。
- でも、サポートセンターのことを今でも知らない人が沢山いることを知った。
なんとかみんなに知ってもらいたい。キャッチミットみたいに受け止めてくれる存在。
- 本当にあの頃、息子もだろうけど、自分もズタズタだった。
心は大ヤケド状態、大出血してる状態だった。でも、少年サポートセンターで止めてもらった。
「お母さん、出血とりあえず止めよう。気持ちの出血止めよう。」って。
そうしてくれてたんだなって、今になって思う。
だから、息子が高校に行って大学行って歌手デビューして、まず電話したかったのは、少年サポートセンターだったんです。
あの時の、あの人たちに伝えたいって、「ここまで成長したよ〜」、「がんばったよ〜」って、伝えたかった。「Mother」という曲を息子が書いてくれて、感動して、まずはじめに少年サポートセンターに伝えたかったんです。